日向派と我々の対立点
—政治組織内容の対立の非和解性—

一九七〇、一二、一二

A
- I 党結上の対立
- II、資本主義批判の対立
- III、到達目標に於ける対立
- IV、世界綱領の内実に於ける対立
- V 党組織論の対立

B
- VI 統一戦線論の対立
- VII、情勢分析の対立
- VIII 党の運営に於ける対立

I、党結上の対立

第一次ブントの世界革命、暴力革命、プロ独、第二次ブントの一向過渡期世界論におけるその具体化↓七回大会路線＝世界同時革命。この路線は一九六八年10・21－11・7－一九六九・1・18・19－4・28の六ケ月の斗いでブルジョア民族国家の壁の前に敗北した。従って我々は、ブント党体をその発展の頂点（一向）において理解し、その意思を継承し限界（一国党）を突破する世界党－世界赤軍（実体として）を建設せねばならない。我々は第二次ブントの党結をふまえ、一向理論の到達した地平をふまえこ、これをさらに発展させる立場に立つ。

しかるに日向は、第二次ブントを清算主義的に、第二次ブント＝関西ブント＝戦術左派集団ときめつけ、自らの血と汗によって担われた実践の持つ積極的意義とその実践がぶつかった壁からこれをいかに突破していくのかを具体的に考えるのではなく、方法論の体系化、観念論の世界へと反動的に回帰している。

第二次ブントを発展止揚させるのか？（我々）第二次ブントを清算しその中から実践的教訓を学びとらないのか？（日向）

この二者択一は非和解的である。この党結上の対立こそは、自らの生きた実践とのその中から認識の源泉をくみとるか否かの対立であり一切の対立の基礎をなす。

II 資本主義批判の対立

党結の非和解的対立は、必然的に自らが行う資本主義批判の論理を規定する。

我々は、階級斗争が直面している壁を、スターリン主義者（スタ・ブハ現行綱領）であろうと反スターリン主義者（宇野経済学と主体性唯物論）であろうとともに、ブルジョア民族国家であると把握する。従って、マルクスの「経済学批判体系プラン」の復権と再構成によって理論的に対象化する。

「資本論」
- I 資本（「資本論」第一巻～第三巻五編）
- II 土地所有（「資本論」第三巻六編）
- III 賃労働（「資本論」第三巻七編五二章の未完の「諸階級」の項で（資本に対立する賃労働）が展開されるはずであった。）

（後半体系）
- IV 国家（「国家形態におけるブルジョア社会の総括」マルクス）
- V 外国貿易（「生産の国際的関係」）
- VI 世界市場（「世界市場と恐慌」）

マルクスにとっては未完であった。

マルクスは一八六八年四月三〇日付のエンゲルスへの手紙の中で現行資本論第三巻の構成について述べている。三巻七編の結びのところでマルクスは「最後に、かの三つのもの（労賃、地代、利潤（利子））は、土地所有者、資本家、賃金労働者という三つの階級の所得源泉だから－結びとして、全汚物の運動と分解とがそこに解消するところの階級斗争」と述べている。資本制社会の階級斗争↓そのブルジョア的解決としてのブルジョア独裁＝民族国家。我々はかくして、マルクスの経済学批判体系プランの継承発展として国家論を提起し世界市場を「諸民族国家と植民地」として対象化する。

マルクス　「資本論」↓後半体系・世界市場恐慌　第一インター↓「世界同時革命」

レーニン　「帝国主義論」（「資本論」蓄積論の「資本独占」の段階での具体化）↓世界市場恐慌の転化形態としての帝国主義戦争　コミンテルン↓「帝国主義戦争を内乱へ」

我々は右記のマルクスとレーニンを継承しつつ、過渡期世界を階級斗争世界として、世界史的な戦争と革命の時代として、従って世界赤軍・世界党に導かれた世界革命戦争による全資本の枠組＝ブルジョア民族国家の解体と世界単一のプロレタリア独裁の樹立の時代として措定する。

スターリニスト国は未だ一国で上部構造のみでプロレタリアートの権力奪取に成功した臨時革命政府にすぎず、生産の国家資本主義を出ていない。国有化の展開によって、世界単一のプロ独樹立に始めて可能な生産手段の世界的、類的所有への転化は行われず、従って過渡期社会に突入したとはいえない。

我々は以上の如く資本主義批判の基軸を権力問題、ブルジョア独裁の民族性を突破し世界単一のプロレタリア独裁を樹立することとして考える。中心軸はブルジョア民族国家である。

しかるに日向は、スタ・ブハ綱領の一環である日実綱領（一国綱領）をめぐる日本資本主義論争を一国的に止揚したにすぎぬ宇野理論（小ブル経済学者）に全面的に屈服する。理論と実践の分裂、科学の階級性を主張する小ブルのあどけない願望の経済学体系に国家論がすっぽり抜け落ちているのは当然であり、权力斗争の時代の本格化はその幻想を粉砕しつくすであろう。宇野理論の原理論は19世紀世界市場を完結として対象としてわらず、イギリス一国内

の純粋資本主義の傾向をのみ抽象する。こうしてその19C中葉にこそアイルランドは人口の絶対的半減を英国に強いられ、英国はアヘン戦争で半植民地化され、インドはセポイの反乱に対する弾圧で植民地化されたのだ。その主体はイギリス民族国家の頂点にあった軍隊であり、国家論なき宇野理論ではとうてい説明できない世界市場だったのである。マルクスのプランは未完であるにせよ「ブルジョア社会の国家形態に於ける総括」を問題とし、その頂で植民地をも理論化しようとしていたのである。〈疑う者は「経済学批判序説」三経済学の方法〈マルクス〉を見よ！〉

宇野は頭の中で資本の運動を、あたかも永遠にくりかえす如き自己運動」であると想定する。そこでこの自己運動・円環運動をこらさせるために主体性唯物論にとどまる小ブルの主意主義的実践に革命の展望を見出す。宇野理論と主体性唯物論とは小ブルの世界認識と主意主義的実践の理論的表現であり、国家権力の前で敗北の運命を強いられている側面をマルクーゼ、サルトル主義者に見い出すのだ。

我々は、反スタマルクス主義の依拠してきた資本主義批判＝宇野理論を国家論なきマルクス主義の小ブル的修正として解体止揚し、同時にその双生児たる主体性唯物論へ梅本・マルクーゼ・サルトルetc.をも解体止揚する。そうすることによってのみ、新左翼10年の限界性、ヘタと反スタのブルジョア民族国家の枠内での悪無限的対立をも突破するのだ。宣言しよう。我々はブルジョア民族国家を資本家的支配の枠組として把握し、世界単一のプロレタリア独裁樹立によって労働の経済的解放をめざす。従ってマルクスの経済学批判体系のプランを継承し、国家論をも含む経済学の対象とする。宇野理論は解体止揚の対象である。

日向は、宇野理論に屈服し、一国主義＝連邦主義に転落し、万人の認める科学へ小ブルのあどけない願望」を追いもとめる。

この非和解的対立は、本来的プロレタリアートの立場を堅持する我々と精神活動従事者（経済学者宇野etc.）を無限に信頼する日向との対立であり、労働者の革命党と小ブル学生党との対立である。

Ⅲ　到達目標における対立

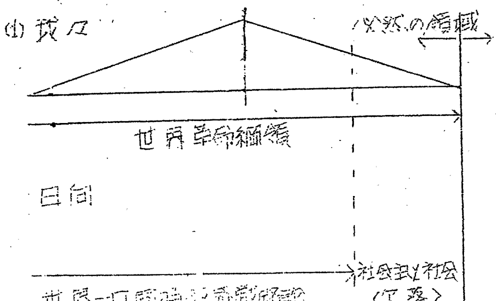
我々はⅡの資本主義批判にもとづき共産主義の把握を資本論三巻最終章の「自由の領域」〈本来的物質的生産の彼岸に横たわる〉として規定する。従って革命の対象領域を単に生産手段との関係における階級の廃絶におくのではなく、固定的分業の止揚、精神諸活動従事者と肉体労働者との対立の止揚におき、共産主義社会のより高い段階まで「戦略論」の対象領域とする。階級概念を単に生産手段との関係でのみ把握するのではなく、労働の次元において、労働における役割の差異としてより根源的に把握すべきであろう。〈疑う者はレーニン全集㉔「偉大な創意」を熟読せよ！〉

これに対し日向は言葉の上では「共産主義を組織する党」と云いつつも「戦略論」の射程を社会主義社会への突入までとする「世界一国(?!)同時革命戦略論」を唱えている。彼には全共闘運動が告発した科学者・技術者（精神諸活動従事者）の加害者性がわかっておらず、これら精神諸活動従事者を解体する社会主義革命がプロレタリア革命固有の基本問題であることがわかっていない。〈もっとも学生として組織できず、経済学者宇野に屈服している日向には、本来的プロレタリアートの革命の根本問題の無理解は当然であろう(笑)〉

〈総括〉

我々は必然の領域から自由の領域への突入を到達目標とし、本来的プロレタリアートが自己に対立する精神諸活動従事者と含めて解体止揚する全過程をプロレタリア革命と考える。日向においては「世界一国同時革命戦略論」の対象領域は社会主義社会への突入までしか「戦略論」の対象領域に入れていない。このことと宇野理論への屈服・労働者を組織化できないこととは必然的に内的関連を持つ。

Ⅳ 世界綱領の内実における対立



到達目標に於る対立は直接綱領の内実に於る対立に帰結する

我々は社会主義社会における固定的分業の止揚、精神諸活動—肉体労働の対立の止揚でプロレタリア革命の基本問題として重視し、近代資本制工場の諸部門に配属された物たる本来的プロレタリアート（技術者、部品工場の工場部分労働者）に依拠しその立場に徹底的に立って斗う。即ち①本来的プロレタリアート ②精神労動従事者（科学者・技術者・芸術家） ⑤小ブルジョア ⑥事務勤労者 ④商業従事者 土地所有者 ⑦ブルジョアジー ②—⑦に至る自己に対立する一切の[illegible]を解体していくのであり、現在の斗いの主要課題にズアジアを解放するための党一党で組織し、その領導の下に世界単一のプロ独を労働者の経済的解放の基本仕ムとして樹立する。

日向は彼らが小ブル学生党であることに規定され、どの階級に依拠するか不明であり、又まで、長でテクノクラート及肉体単純労働者を否認していることに無自覚である。

(2) 我々は、世界単一のプロレタリア独裁の樹立をめざし、樹立されたプロ独は民主主義的中央集権制統一共和制であると考える。その根拠は我々の資本主義批判に基づく。資本の[illegible]ブルジョア民族国家である以上、労働力の経済的解放をめざす権力は世界単一のプロ独にてブルジョア民族国家の枠組を解体して樹立されねばならない。マルクス及び蓄積論を抜除せず、剰余価値論にのみ依拠して展開された共産党宣言に依拠して形式上の一国プロ独云々を述べている日向は後期マルクスの資本論体系に全く無自覚である。

日向はスタ、ブハ綱領に準拠、追認（後者は日向理論戦線ノミ説すとコミンテルンドキュメントⅡに素録されているスタ・ブハ・コミンテルン6回大会綱領を比較して読んで検証せよ）プロ独当初は連邦制であると言う。これは国家論なき宇野理論に屈服した必然的帰結である。

世界単一の中央集権化されたプロ独（統一共和制）と、連邦制（日向・スタ・ブハ）と、この対立は非和解的である。

(3) 我々は世界単一のプロ独樹立過程を、一切のブルジョア民族国家を解体する全地球上を単一の戦場とする世界革命戦争であると考える。従ってこの世界単一の革命戦争の過程でスターリニストの民族国家社会主義と対決、その基本的従属国と同時に打倒するのだ。

日向はスターリ[illegible]世界的プロ独(3)まで打倒すると言う。これは宇野理論（反スタ）とスタハ綱領及いずれもブルジョア民族国家の枠組＝労働力支配の枠組として明確に対象化しえていない資本主義批判の貧困性に規定されているのだ。

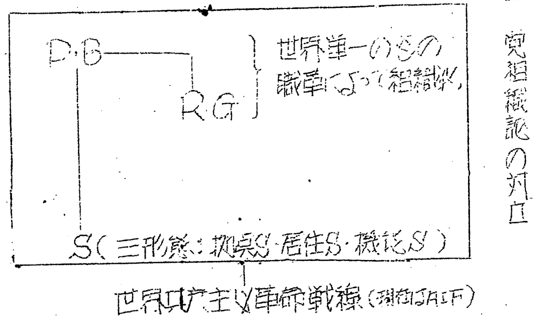
Ⅴ 党組織論の対立

（以下レジュメのみ）

我々は非合法党

日向は事実上合法党
RG—将校団、AIF
—正規軍論及その典型

Ⅵ 統一戦線論の対立



我々→八木沢論文
党一軍の運動論的表現
他党派解体の場としての八派共斗

日向→八派共斗に事実上溶解

Ⅶ 情勢分析の対立

我々→全世界を対象化
安保・NATOの規定要因
（①国際階級斗争の高揚の結合
②帝国主義の不均等発展

日向→国際階級斗争の分析欠落
安保・NATOの理解
—水平分業論＝超帝国主義論
体制保守否論

Ⅷ 党の運営における対立

我々→上からの党建設

日向→下からの党建設
党機関無視の運営
PB決定ぬきの全国動員
ニセRG、ニセ神奈川AIFのデッチ上げ
etc.

KNM
AIF
→BUND